

国際口承文学学会第十三回メルボルン大会報告

高橋吉文

クトリニア民俗学会Victorian Folklife Societyの女性研究者たちで、手際よくかつ親切な彼女らの対応には好印象を受けた。

国際口承文学学会（International Society for Folk Narrative Research, 略称ISFNR）第十三回大会は、南半球にあるオーストラリアのヴィクトリア州の中心地メルボルン市にあるメルボルン大学The University of Melbourne Australiaにおいて、1990年七月十六日から10日までの約一週間開催された。この国際大会は、その合間に催される小さめの中間大会を除けば、四年に一度開催されるもので、前回の第十二回大会（1998）はドイツのゲッティンゲン大学で開かれ、今回は所を東に移し、アジアに近い南半球の大陸が舞台となつた。しかし、会員の多いヨーロッパには遠いことや、世界的な不況という事情もあってか、当初200人程の発表申し込みも、ごく僅をあけてみれば、100人強程度のかなりじぢんまりとした大会となつた。

運営の中心となつたのは、Susan Faine女士を会長とするヴィ

十五度前後、皆コートに身を包む。北海道でいえば十月中旬頃の気候である。

第十三回大会のテーマは、「伝統と変容—現代世界における□承文芸 Traditions & Transitions — Folk narrative in the contemporary world」で、近年オーストラリア社会が多元社会として諸民族との共存を積極的に進めている流れを強く反映してか、先住民族アボロジニの文化とオーストラリア社会との関係を軸にしようとしていたかに見える。開会のセレモニーにおけるアボロジニの伝説的な語り部 Boori Pryor氏による歌や踊りの実演と解説を皮切りに、この国の多元文化ぶりを反映する巻き寿司等の東西が混淆した昼食の会でなされた、伝説的な開拓者 bush worker で「ブッシュ（森・開墾地）・ミュージッシャン bush musician でもあつた高齢のサイモン・マクドナルド Simon McDonald氏の若かりし折りの対話等をおさめたビデオ（一九六五年）の上映、さらには先住民関連の著作の陳列等、地元の□承文芸の積極的な紹介がなされていたようと思う。

ちなみに、筆者は同僚の高橋宣勝氏と飛行機で開催地に向かつたが、途中ブリスベン空港でメルボルン行きに乗り換えるためロビーに座つて待っていた。実はその時私たち2人のすぐ目の前に座つていたのが、何とオーストラリア□承文芸の生き証人であるそのご老人であったのである。その凛とした気品漂う態度、優しさと味わいのある容貌は印象深く、そのビデオを見て初めてそのご本人であること、そしてご本人がそこに列席さ

れていることを知った次第である。
三日目の七月十八日（水）は休憩日で、遠足・遊覧が数コース設定され、各自が好きなコースを選択することができる。私たちは美術館めぐりを選んだが、残念なことに重要作はほとんど海外に出品されていて見るべきものは皆無、おいしい紅茶等のティータイムや会食は別として、これはまつたくの肩すかしに終わつたといわざるをえない。

さて、本題の研究発表は少な目とはいっても数にしてほぼ一〇〇本強、そして英語に拙い筆者が実際に聴くことのできたものはその中のほんのわずかでしかなく、私の見聞録のみでは大会全体の模様、傾向を報告することはできない。それゆえ、大会で配布された要約集（abstracts）を通読して、その全体傾向について私個人が抱いた感想を簡単なコメントとして述べることとした。

この学会では発表言語は指定された数カ国語から自由に選択することができる。しかし、開催地がメルボルンであつたため実際にはほとんどすべてが英語で、ドイツ語が二本、ロシア語が一本で、ドイツ語の発表は日本人によるものであつた。前回のドイツでの大会と比べて見ると、開催地によつて発表言語の比率は大きく異なるようである。

この学会は、アジア、アフリカ等の発展途上国の研究者たちに学会参加資金援助を行つてゐる。そのため、世界各地から多彩なメンバーが勢揃いする結果となつたが、これはこの学会の

誇るべき特質のひとつに違いない。とはいって、アフリカならば今はヨルバ族に関する発表、インドであればベンガル地方やオリッサ地域に関する発表等、同じ地域からの研究者が集中する傾向にあつたように思う。そのアフリカやインドでは口承文芸が現在進行形で生きている状況とともに、西アフリカに生じつつあるその凋落の兆しや、インターネット等と融合するケーブル等の報告がなされていたが、なかでも東スラヴで最近なされた調査により聖書関係の口承文芸や古来の儀礼が豊かに生きてゐる事例が新たに確認されたケースは、世界には今なお口承文芸の未知の鉱脈が埋蔵されていることを強く感じさせるものであつた。

隣国では中国が多く、千以上もの女神への信仰、仏教説話の変容、三二巻に及ぶ中国昔話体系の刊行（現在十二巻まで刊行済み）、プロップの中国民話への応用検証等、多彩な研究テーマをもつて多くの研究者が参加していたことが目についた。そして、当然のことながら地元オーストラリアからも発表が目白押しであったが、しかし先住民差別批判でなければ、オーストラリア国家や民衆のアイデンティティ形成批判かといったところで、すべては政治的テーマに終始し、正直いって単純で魅力に乏しいという印象しか残らなかつたのは、やはり歴史的伝統の浅さのせいかもしれない。

とはいって、こうした傾向は、オーストラリアにのみ特有の症状というわけではない。今回の大会は総じて時代傾向をもろに

反映して、口承文芸以外の研究分野におけると同様、フーコーを淵源とする語りや祭り等が秘めているディスクールの政治性や権力性、性差別構造等への批判、ベネディクト・アンダーソン（『増補版 想像の共同体』）等による国民国家や民族的共同体、さらには近代的諸装置への批判的視点といった人気アイデムにあまりにも強く、あまりにも安易に依拠している気配が濃厚であったからで、口承と文学、語りと記述といった口承文芸学会につきものの主題への言及も少なくはないものの、それとも、基本的にはアイデンティティや政治的な謀略メカニズムの方向で論じられていく。したがつて、純粹に口承文芸として論じられるといった論考は、皆無とはいわないものの、まさに僅少、しかも例えばサモア諸島初の辞典編纂作業、あるいはインドネシアのある少数民族初の辞典プロジェクトの報告、密着取材に基づくフィンランドのロマ（ジプシー）に関する民俗的報告、ムスリムたちの墓のテーマ、壁画の解説、埋葬地選択基準考察等、どこに口承が、と仰天するものも少なくはない。

しかししながら、研究ジャンルのクレオール化に加えて、世界中から自国の研究状況を伝えうる国際的な組織といえるものがなく等しい状況下で、この国際口承文芸学会は、民衆という漠然たる怪しげな領域に低い視線で、きわめて近いところに位置しようとした誠実に意志するその基本的特性から、たんに口承文芸という領域にとどまらず、民俗学的ないしは政治的状況の分析等も包みうる数少ない貴重な場であるのかもしれない。

この学会の主流をなすのは、世界の諸国からやつてきた多様な発表者たちが自國の口承文芸に関して行う多彩な研究報告である。その発表内容も、古典的な民話研究はもとより、素朴なことわざ研究から、有名な現代伝説「消えたヒッチハイカー」の一三六篇のバージョンを蒐集した南テキサスのデータや、その現代伝説の信じ方や話を聞く場所の男女間における違いの分析、あるいはまた説話とインターネットとの関係等にいたるまで、まことに多岐にわたつており、それゆえ、世界的な規模での多様性にじかに接することができる。けれども、時代の流行である上記の視点や批判アイテムの伝播と浸透、そしてそのすればやくて軽い応用は、こうした資料が示す本来の多様性すらどこか千篇一律なものに単純化されてしまう弊を伴う。こうした批判的な諸理論の大本であるヨーロッパ自体はいわずもがな、そこから離れているはずのアフリカであれインドであれオーストラリアであれ、これ程みごとに金太郎飴のように同じような思考法や分析道具（アイテム）がずらり居並ぶ光景というのは、やはり異常としかいよいがない。各国各地域の独自な口承文芸が、経済システムや情報の高速のグローバリゼーションに何かされているという、これまで本大会でも取りあげられることの多かつた切実な問題も、しかし、研究者たち自身の視点の画一化的流行というこの現象のうちに、すでに顕著に発症しているように思われたのは、筆者の杞憂であろうか。

もちろん、個々の研究レベルないしはその報告内容は玉石混

交であり、要約からでは実際の発表を推察することには限界がある。こうしたアイテムを枠組みとしつつも、私たち日本人にとって刺激的なデータが報告されているケースも幾つもあり、また現在世界に流行している上記の視点や方法が有効性をもたないということでは決してないものの、発表レベルがやや甘いところでも、畢竟世界各地の地方学会での発表が集合しただけのことであり、むしろ日本の学会のレベルの高さを痛感したというものが、ホテルのベッドに腰をおろしオーストラリアの缶ビールを片手にして、高橋宣勝氏と私とが二人して覚えた感想である。とはいっても、国際大会が有する意義と原点は、稚拙であれ、高度であれ、世界に対しても発表しあうという点にこそあり、そうした難点だけに尽きるものでないことはいうまでもない。アボロジニやオーストラリアの多民族国家神話批判とともに、この大会の目玉商品のひとつとして設定されていたものは、平家物語から淨瑠璃、説教節を経て浪花節にいたる語りによる日本の大衆芸能の系譜の紹介であった。これは、メルボルン市でヴィクトリア州の日本語教育を統括している日本文化研究家アリソン・時田ご夫妻の尽力と主導によるもので、学会中の一日の午前午後を確保して、平家物語から浪花節にいたる語り芸能の諸相を具体的に紹介していく意欲的なプログラムとなっていました。語り手が自在に位置を変える現代小説のような構成を論じ

たアリソン時田女史の発表を初めとして、師匠と弟子の口伝方式を紹介するフランス人研究者等海外の研究者をも交えて、兵藤裕己、真鍋昌賢、芦川淳平、山下宏明等諸氏の日本人研究者たちによる堅実な発表が軸をなす全体構成で、筆者がたまたま聴くことのできた中では、達者な英語と明解な論展開を示す薦田治子氏のプレゼンテーションが印象的であった。

残念なことは、数会場が同時進行ゆえ、聴衆の数がどうしても限られていたことである。関心がなかつたわけではない。大會中の一晩を割いて、日本から招かれた薩摩琵琶や浪曲等の名人の方々による上演デモンストレーションが行われ、これには実際に多くの聴衆が集まつたと聞いている。演奏者側からは、高度な、一見地味な内容の演目であるにもかかわらず、ないしはその芸術的高さのゆえに非常によく伝わったとの感想が、そしてISFNR会長のハサン・ロケム女史（イスラエル）を初めとして聴衆として参加した多くの学会メンバーからは、「すばらしく」との感動や絶賛の言葉が寄せられていた。歌舞伎や能等の海外公演はもはや珍しくもない時代とはいえ、薩摩琵琶による語りや浪花節等のこのように本格的な上演と紹介は、おそらく今回が初めてと聞いた。とするならば、これは、古典的な日本の語りの大衆芸能が世界にも十分に通用することが証明された画期的な瞬間だったのではないだろうか。

日本からの参加者は、上記の語りもの関係の数名の方々を除けば、龍谷大学の中山淳子氏（独語）と北海道大学の高橋宣勝

氏（英語）、そして同じく北海道大学の筆者高橋吉文（独語）のわずか3名で、発表は、中山氏が「異常な伝播—グリム兄弟の童話集の日本への紹介」と題して、明治にグリム童話を小学一年生用の教材に採用したことにはじまる日本におけるグリム童話受容史を詳しく辿り、ヨーロッパにとっては垂涎の貴重な受容史データを示していたとすれば、高橋宣勝氏は、英國バラッドを例にとって、ご自身の見事な歌唱実演も織り込みながら、日本と西洋の変身に対する基本的理説の違いを説明し、統一して札幌の藤女子大で行つた変身理解パトーンに関するアンケート・データに基づき、現代の若い世代の感覚が従来の日本的なものから西洋的なものへとはつきりと推移しつつある事実を報告してみせた（「日本の若者たちにおける伝統の喪失」）。高橋吉文は、「グリム童話の構造分析—KHM64 金のがちょう」と題して、「金のがちょう」に顯著な食べ物の反復現象を手がかりに、前半と後半とが対称性構造をなし、記号的構成として前半と後半とが同一になつてゐるグリムや民話に隠された物語構造の存在を証明した。

大会全日程が終了した最終日二〇日（金）の夜は、威厳のあるオーモンド・カレッジ・ホールにおいて、大会参加者を招待しての晩餐会が開かれた。ここはいかにも英國伝統直系の堂々たるホールで、まさにハリー・ポッターの魔法の学校の蒼古たるホールさながらほとんど蠟燭の明かりのみの闇の中で行われた莊嚴な会食は、伝統のないオーストラリアが頑固に守り伝え

てきた英國伝統の喚起する魔術をさまざまと示し、深い感動を与えるものであった。

次の国際大会は、二〇〇五年七月バルト三国のエストニア共和国タルトウ市で開かれるとのことである。エストニアは東洋の騎馬民族の流れをくみ、古い独特の文化を残す口承文芸や習俗の宝庫である。また、大きな大会間に催される中間学会の開催地も、二〇〇三年八月ゴトランド島ビスビュ一市にあるゴトランド大学と決定された。スウェーデン東方のバルト海に浮かぶ九州程の大きさのこの北欧の島も、北方ゲルマン人の資料が数多く発掘されている考古学や民俗学上稀代の名所のひとつである。

ともに疲労困憊状態で札幌を立ち、メルボルンでさらに疲弊しきつた高橋宣勝氏と私の二人は、翌日、夜の飛行機までの空き時間、街を観光散策することにした。お上りさんよろしく二人のんびり有名な聖パトリック大寺院めざして歩いているうちに、間違つて聖ポールなる大きな教会に迷いこんでしまった。オーケストラがちょうど演奏会のリハーサルを行つてているところであつた。私たちの知らないオーストラリアの作曲家のものとおぼしき曲に続いて、モーツアルトの有名なモテト「アヴェ・ヴエルム・コルプス」が女性歌手によつて爽やかに歌われた。泥沼のように疲弊しきつていた二人の心と体に、それらの潰刺たる音楽は、人気の少ない寒々とした教会の中、何とすばらしい天の恵みのように響いたことであろうか。

（たかはし・よしふみ／北海道大学）